論　文

高知県長岡郡大豊町岩原と香美市物部町別府の民話
－民話分類の再考－

橋尾　直和

1. はじめに

本稿は、高知県立大学における学長助成事業である「2018・2019（平成 30・31）年度戦略的研究推進プロジェクト」に採択されたテーマ「言語文化教育としての『民話』を活用した学術的・国際的な地域還元型教育」の調査研究の一環として実施した「高知県長岡郡大豊町岩原と香美市物部町別府の民話」調査結果の考察である。『高知県立大学　文化論叢』第 7 号（2019）において、「高知県長岡郡大豊町岩原と香美市物部町別府の民話」として報告を行ったが、その後、民話の分類を再考した結果、両地点ともに「昔話」に当たるものは、存在しないことが判明した。そこで、民話分類のあり方を検討し、再分類した結果を改めて本稿で論じることにした。

まず、本プロジェクトの構想の背景と目的について、述べておきたい。

プロジェクト構想の背景

本県の「民話」（昔話・伝説・世間話など）の採集は、昭和 10 年代から始められ、戦後も、研究者たちによって貴重な話が記録されてきた。しかし、一般的には民俗調査の副産物として偶然採集されたものが多く、内容、形式に関心が集中し、話のみを採集し、語りの場や伝承経路、話の機能、家やムラなどの話者をとりまく諸問題との関連を明らかにしたものは、あまり見られない。民間伝承としての「民話」は、他の民俗事象と同じく家やムラを離れて存在するものではなく、それを生み出し伝承してきた地域社会との関連において、構造的・総合的に考察しなければならない。「語り部がいなくなった」と言われる昨今であるが、調査の手を差し伸べられずに眠っている語り部はまだ存在する。全国には多くの民話集や調査報告書が刊行され、もはや整理と比較研究の段階に入ったとも言われているが、高知県にはまだ学術的調査から取り残されている地域が多い。これらの地域における正確な記録・保存活動を急がねばならない。すなわち、本県における「民話」という地域文化資源の再発見とその利活用という発想が求められる。

また､採集した「民話」を教育現場に還元する､いわゆる「地域還元型教育」という発想も必要となってくる。地域の文化資源である「民話」のもつ教育力を大いに教育現場で活用することである。語り部が「民話」を生徒･学生たちに語ることは､地域文化の次世代への継承へとつながる活動となり得る。「民話」に登場する地名、文化財、伝統行事、風習、方言などを生徒・学生たちが調査研究することにより、地域の歴史・文化・環境などを同時に学ぶことができ、学習指導要領に掲げられている「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と重なるところである。これはすなわち、本事業が展開しようとしている言語文化教育としての「民話」を活用した地域還元型教育研究が、大学のみならず小・中・高等学校の教育理念と連動していることを意味している。「継承されてきた伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度を育てることや、国語の果たす役割や特質についてまとまった知識を身に付けさせ、言語感覚を豊かにし、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てることをねらいとしている」理念と合致している。この点は、本学の掲げる中期計画の「高大連携」の目標と

合致するところである。

プロジェクトの目的

本事業は、本県の「民話」の伝統的な型を多分に残している大豊町岩原と物部町別府の「民話」の記録・保存活動を基にして、「言語文化教育」としての「民話」を活用した学術的・国際的な地域還元型教育にアプローチするため、学際的なメンバーで構成されている。文化環境言語学的調査研究は代表者の橋尾直和、国語教育学的調査研究は井上次夫、中国古典・説話文学的調査研究は高西成介、人間学・哲学的調査研究はオバーグ・アンドリュー、近代文学的調査研究は田中裕也が実施する。

なお、学外協力者として、高知県立歴史民俗資料館の梅野光興学芸員、豊永郷民俗資料館の釣井龍秀学芸員、香美市教育委員会生涯学習課の小林麻由文化班職員らのアドバイス・協力を得て事業を実施する。現地協力者として、「民話」の語り部である大豊町岩原の下村尭基さん、物部町別府の松本善夫さんに「民話」の記録・保存調査、ワークショップ等での協力を得る。

具体的には、文化環境言語学の立場から、「言語文化財」としての観点から、大豊町岩原と物部町別府の民話の記録･保存活動を行い､民話とその「文化環境」との関わりについて考察する。IC レコーダーで収録した民話を教材用として CD に保存し、教育現場に還元する。国語教育学の立場から、国語教科書における「言語文化教育教材」という観点から小学校・中学校・高等学校の調査を行う。本県で採取された民話の分析を行い、教育教材としての民話のあり方について考察し、新学習指導要領に対応した教材化を行い、校種別教材を作成する。小学校・中学校では「伝統的な言語文化」の観点から、高等学校では古典の観点から指導目標を設定し、教材冊子として発行し、解説を加える。また、教材化研究、教材冊子作成に際しては、国立教育政策研究所・東京学芸大学等を訪問し、資料や助言を得る。近代文学の立場から日本近・現代文学と高知の「民話」との関わりを調査・研究する。本プロジェクトの調査地域とも関わりが深いタカクラ・テル、笹山久三や中脇初枝などの「民話」の受容と創作のありようを明らかにする。この調査で地域共同体の中の「民話」としてだけでなく、日本の中で作品として通用することを考察する。人間学・哲学の立場から、本県の「民話」における宗教と信者の信仰との関係を考察する。

2. 調査地点の概要

2.1 長岡郡大豊町岩原

高知県長岡郡大豊町は、四国のほぼ中央、愛媛と徳島の県境にある山間の町である。さらに岩原地区は、町の北東部にあたり、町を流れる吉野川の東岸に位置する集落である。

標高 203m にある JR 土讃線土佐岩原駅から標高約 830 mまでの急峻な傾斜地に集落があり、豊かな自然が残る山間の地域で、ゆったりとした時間の流れの中で、昔ながらの生活が営まれている。

岩原は、世帯数が 63 世帯、人口が 121 人（男性 62・女性 59）（2018 年 12 月末現在）である。

この地域に伝わる岩原神楽は、「磐原神社の創祀沿革」によると、天慶（938 ～ 947）天暦の頃（947 ～ 957）岡崎権六郎重良が伊勢より勧請し、奥荒に社殿を建立し、伊勢大明神として祀った際に奉納したものがはじまりと伝えられている。のち亨徳２年（1452）大洪水のため三宝山に社地を拓き、翌３年遷宮に奉納した人達の子孫が､今尚「神御子」として直接神に仕える制度が残されているところから、神楽はこの時代より始まったものと思われる。

その内容は、神祭りに際して祷屋（とうや）を立て、酒宴を開いて「散華」と称する六根清浄の行をおこない12月の月歌をうたって、時には乱舞し、その後その家の庭先で神楽を舞う。これは県下的にも他に類例を見ない貴重なものである。楽器は大太鼓と鉦拍子である。その舞での持ち物によって、幣の舞、双刃の舞、二天の舞、弓の舞、長刃の舞、扁芸の舞、魚夫の舞、舟の舞、鍬の舞、宇賀の舞、宝の舞、四天の舞、猩々の舞、獅子の舞などがあるが、すでに忘失されたものもある。神楽を祷屋の庭先で舞い「散華」を行い、手面をかぶり、白装束で芸術的な所作を展開するこの神楽には芸能以前の古い名残が少なくない。

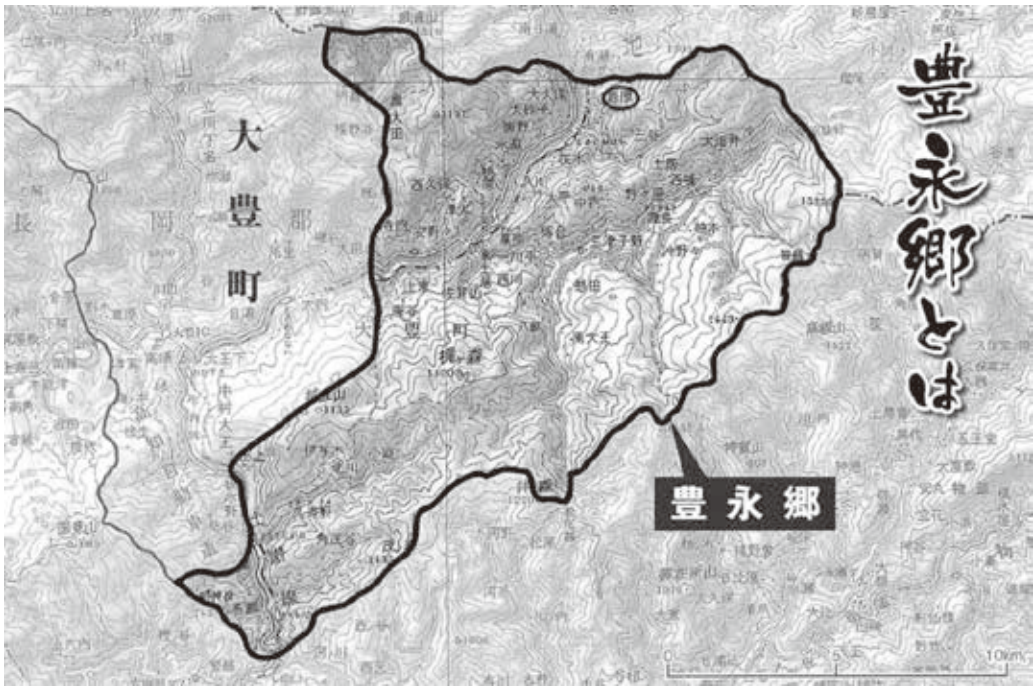

図1　長岡郡大豊町岩原の位置（釣井編 2011：p.1による）

2.2 香美市物部町別府

高知県香美市物部町は、徳島県と境を接する険しい山岳地帯に位置し、焼畑農業や林業、楮、三椏の栽培を主な生業としてきた。また、柚子の栽培でも知られている。林業を支えるために、大栃などの中心部には鋸や厚刃物の鍛冶屋があった。近年は増えすぎたシカの被害が問題になっているが、以前から狩猟も盛んな土地柄であった。平家の落人伝説も各地に残っているが、確かな史料が残るのは、大忍庄や韮生郷と呼ばれた中世以降である。

物部町別府は、世帯数が29世帯、人口が40人（男性19・女性21）（2018年12月末現在）である。

この地域に伝わる「いざなぎ流」は、香美市物部町を中心にした地域に伝わる民間信仰である。「太夫」と呼ばれる宗教者が、家や村の神の祭り、大山鎮めや荒神鎮め、米占い、病人祈禱などに携わってきた。神々を祭る時は、「祭文」と呼ばれる神の由来を語る物語を読み上げ、数珠や笠竹を使った占いで神の意志を確認するため祭儀は長時間を要する。普通の屋祈禱で一日がかり、本格的な大祭になると三日から一週間かかる。また、神を祭る時は、御幣を何十本も三階の棚に切り飾る。仮面は、神としてあがめられ、太夫達もその扱いには慎重である。

そのルーツは謎であるが、陰陽道や修験道、神道や巫女の信仰などが渾然と一体になったもののよ

うである。同様の信仰は、各地の民俗芸能の神楽などに断片的に伝えられているが、「いざなぎ流」ほどまとまった形で残った所は、貴重である。

「いざなぎ流」を伝えてきた香美市物部町は激しい過疎のため人口減が止まらず、神祭りの実施も困難な状況に陥っている。

図 2　香美市物部町別府の位置（小松 2011：p.4 による）

3. 民話の分類方法

福田（2000）は、民話を「神話」「伝説」「語り物」「昔話」「世間話」の 5 つのジャンルに分類している（表 1）。そして、〈伝承者〉〈伝承の機会〉〈伝承意識〉〈証拠の有無〉〈時制〉〈固有性〉〈述形式の有無〉に基づいて分類している [1]。また、各ジャンルの伝承上の特質である主題・観念・思想に基づいて、各ジャンルの伝承場の特質についてまとめている（表 2）[2]。

橋尾（2019）で提示した分類について、本稿では、大豊町岩原の民話の「立川送りの話」を【昔話】から【世間話】、「シデンタキの話」を【昔話】から【伝説】、物部町別府の民話の「番所と不入山の話」を【昔話】から【伝説】、「太刀の舞の話」を【昔話】から【伝説】、「兄弟の怪力の話」を【昔話】から【世間話】へと、それぞれジャンルを変更することにした。

表１　民話の分類（福田 2000：p.5 による）

	神話	伝説	語り物	昔話	世間話
〈伝承者〉	司祭者	古老	専門的語り手	語り爺　語り婆	世間師
〈伝承の機会〉	祭儀	祭儀の周縁	祭儀の周縁	イエの炉端	談合の場
〈伝承意識〉	疑えない真実	信ずべきコト〈信仰行為〉	あったとされる史実	あったかなかったか不確かな虚構	あったことが疑えない真実
〈証拠〉	ナシ	アリ	ナシ	ナシ	ナシ
〈時制〉	神の世	古へ世 中つ世	中つ世 近つ世	遠い昔	近代
〈固有性〉	アリ	アリ	アリ	ナシ	アリ
〈叙述形式〉	アリ	ナシ	アリ	アリ	ナシ

表２　各ジャンルの伝承上の特質（福田 2000：p.7 による）

	神話	伝説	語り物	昔話	世間話
主題	国土・人類・文化の起源	聖なるコト・モノの由来	異常な不幸	異常な幸福	奇異・不思議な伝説
観念	大自然の営みを畏怖する観念	小自然の営みを畏怖する観念	人間存在の可能性を否定する観念	人間存在の可能性を肯定する観念	人間・社会に畏怖・驚嘆する観念
思想	大自然の始原を尊ぶ思想	小自然の起源・崩壊を恐れる思想	人間の不幸を確認する思想	人間の幸福を確認する思想	人間社会の現実を見極める思想

4. 高知県長岡郡大豊町岩原の民話

大豊町岩原では、全部で 12 話を収集できた。内訳は、伝説が 3 話、昔話が 0 話、世間話が 9 話となった。漢字を当てることのできない人名、食べ物の名称などはひらがな、漢字を当てることのできない地名、生活用具（民具）などはカタカナで表記している。

【伝説】

岩原八幡(はちまん)神社の始まりの話

どういうわけで、天草四朗の応援に行ったかは、わからんのですけんどね、行ったことは間違いない。その時に、「無事帰れたら八幡(はちまん)神社としてお祀りする」というお願を懸けて、かまどの石を負うて行ったそうですね。そして、いくさには負けたけんど、一族郎党がみな無事で帰り着いたと。今は八幡畝(はちまんうね)と言いますけんど、昔は中畝(なこうね)に、無事帰ってきたので、八幡神社をここへ勧請して、お祀りをして、下村一族の先祖として、八幡様としてお祀りしよったんですが、いつの時代か、部落の八幡様でもあり、愛宕(あたご)神社という火事の神様を合祀して、岩原部落でお祀りをするようになったんですね。

三谷(みたに)集落の話

そこの三谷という集落。今は、16 戸ぐらいしかないんですけんどね、戸数は。最盛期には、20 戸、20 数戸あったと思うんぢゃけんど。まだ、三谷と言う集落が完全にできてない時期でしょうねえ。集落としての共同体が、できてからの事ぢゃけんど。ここから、まさか上流には、人はおりゃあせんろうという、そういう観念で、みなさん仕事もしたりしよったら、ある日突然上流から、茅で作った箸が流れてきて。ほして、これは上流に人がおるに違いないということで、上がって行ってみたら、そこに一家族、ちょっと離れたとこですけんどね、一家族生活してたという。

シデンタキの話

岩原には、シデンタキというて、死んで出るタキと書いて、字はほんとはどう書いてあるかは、わからんのぢゃけんどね、シデンタキっていうタキがあります。水は落ちてないんです、ただの崖っぷちですけんど、落差 100 メートル以上あるけんど、ここらでは大きなタキの事を、デンダキと、デンダキとも言います。それはね、規模の大きいタキのことを言うんですけんど。そのデンダキと言うんには、最もふさわしい、岩原では一番ね、高低差があるタキぢゃと思うんですけんど。で、それは、実は姥捨て山の伝説がありまして。ロクイチ（※ 1）を祝うたら、そこから放りよったと。んで、人に税金がかかる時代があったようぢゃけんど、ほんでもう役立たずになって、生けず死なずっていうになった人をですね、そこへもう放りよったと。

（※ 1）還暦の意。

【世間話】

立川送りの話

ここらではその、立川送りっていう、あれがありますわねえ。で、立川の番所へ、割り当てで、行かないかんというけん。ご馳走食べとうなったらねえ、「明日か明後日は立川へ行かないかん」て言うて、騙したっていう話も、聞きましたですねえ。ここらでは、各個別にぢゃなしに、何人かをグループで立川へ行けと。こっから立川行くったらねえ、夜中にここを出発せにゃあねえ、大杉よりまだ遠いですけんねえ。まあ、昔の人は歩くのには、だいぶ早かったとは思うけんど、ただし、国道があるような状況ぢゃないですけんねえ。

年玉の話

岩原の庄屋の小笠原家の丁稚が、忘れたらいかんけんというんで、年玉、年玉というて、丸の川の飛び石を渡りよって、火玉んなって。ついつい、火玉でそのまま、筏木の長尾という庄屋の所へ、長尾、長い尾っぽですね。もうそこの家は、無いんぢゃけんど。その長尾という庄屋へ、年玉を遣わないかんのを、「正月の挨拶に火玉を持ってきました」と言うたら、「正月そうそう火玉とは何たることぞ」ということになったそうぢゃ。

琴平の遊郭へ行った話

これも実際にあった話ぢゃけんど。これは、琴平の遊郭へ行った人がですね。それはちょっと知能の遅れた人で。遊郭に上がって、いざ行為に及んだところが、女郎さんの方が、なかなか男がしまいやせんけん、ちょっと文句を言うたらしい。ほいたら、「たった一突き（ひとつき）のはずぢゃった」と。「土佐の一月（ひとつき）は30日ござる」。「ほろどえるようなら銭戻せ」。ほろどえるっていうのはね、「泣き言言う」ようなら、というような意味でね。ほんでもう、姐さん観念して、「ほんなら、姐さんもとからすっぱりやり直し」って。言ったっていう話よね。それも実名も有るんぢゃけんど、その実名がは忘れたけんどね。

青坊主の話

これはそれこそ実話で、大正時代か昭和の初期ぢゃと。実は粟生という、定福寺のあるところでね、あそこの秋田っていう前に、店があったんぢゃけんど、今もうやまって、ないですけんど。そこがもう秋田百貨店っていう、何でも屋ぢゃったんですねえ。ここらでは、日常生活品を買うのは、全部そこで買うて、それをオイコ（※1）につけて、負うて戻りよったんですね。で、日が暮れて帰って来よって、昔の村道というのを、この向こうまでずっと粟生まで続いとるんですねえ。その道を、まあ一生懸命歩いて来よって。首吊り畝ぢゃ、卵塔ぢゃいうような寂しい寂しい所をですね。そこをずっとこう、行きよって、卵塔の所でひょっと後ろを振り返ったら、青坊主が、「後ろをついて来よる」、と思うて、それから3キロばあ走って、もうどうしても走れんと思うて、座り込んで、ひょっと振り返ってみたら、秋田という所で柄杓を買うてですね、オイコへこうつけて、差しちょったのがねえ、柄杓が見えて、それが青坊主に見えて。それはもうまっこと、その人はもう必死で、そこまで3キロばあほど走ったということです。

（※1）背負い子。荷を背負って運ぶための道具。

茅の運搬の話

屋根を葺く茅の運搬を、せにゃあならんようなって。部落共同で運搬をしよったところが、重衆（じゅうしゅう）という人が、やすば（※1）ごとにあんまり荷を直すので、しゅうぞうという人が見かねて、「重衆、そこをのいてみい。おらが荷を直してやる」こう言うて、親切にいたところが、「貴様おらをわやにすな」と。「ここは、一人前経（た）たんものは、来ちゃおらんはずぢゃ。人のさいろく（※2）は放っておいてくれ」と言うて、その場は終わったんですが。次のやすばかどっかで重衆の話が出て、「重衆もああいうすくたれ（だらしない者）ぢゃけん、嫁にも来てがないわ」と言う話が、たまたま重衆の耳に入って、重衆が「へごなことを言うな。かんぢゃの様（さま）（※3）でも、貰うてみにゃあわかるまいや」こう言うて、皆さんの前で、啖呵（たんか）啖呵を切ったそうぢゃ。

（※1）休憩場所の意。（※2）差配のこと。（※3）加持屋の娘。加持屋は屋号。

志和久寿万翁（しわくすまおう）と杣師（そまし）の話

筏木（いかだぎ）という部落に、熊本の医大を出た偉い志和久寿万翁（しわくすまおう）という、お医者さんがおったそうです。そのお医者さんの所へは、いろいろな患者さんが来たようですが。一里ぐらい離れた所で、杣師（そまし）が膝へ、ソマ（※1）が刺さったということで、これは大事（おおごと）ぢゃと。「一滴の血も出ん、けんど冷たい」とこう言うて、「へんしも（※2）みんな来て、かいて（※3）降りてくれ」と言うことで、戸板に積んで、4人がかりでかいて行ったそうです。病院へ行って、先生が「どう、その手を除（の）けてみい」とこう言うて、手を除けると、中からアオビキ（ヒキガエル）がピュッと飛び出たと。みんなあが、ほんと、大笑いするやら、憤慨するやらで、一代の語り草になりましたね。

（※1）手斧のこと。（※2）「急いで」という意味。（※3）この場合、戸板などで担架のように担いで運ぶこと。

音市（おといち）さんと山鳥の話

音市（おといち）という人が、岩原の隣部落の有瀬（あるせ）という所におったんですが。この方は、製材をするのが本職で、山へ行きついたのが10時ちょっと手前。ちょっとひだけて（※1）行くというタイプの人でしたが。まず行ったら、一番先、発動機をかけて、発動機の音が、一定の音で、タンタンタンタンというような音がしだすと、山鳥がそれに反応して、出てきたそうです。で、音さんはオガの刃を、オガ材の上へ上がってですね、すりよったら、山鳥が前を横切ったんで、発動機のエンジンも止めんまま、ずうっとその山鳥を追っかけて、1日やって帰ってみたら、発動機はもう、燃料が無いなって止まって、オトさんは、山鳥はよう捕まえん、仕事は全然せんずくに（※2）、1日棒に振ったと、いうことぢゃった。

（※1）「日が高く昇る」という意味。（※2）「しないままに」という意味。

音市（おといち）さんとお餅の話

音市（おといち）さんと言う人は、年末に、正月に搗くもち米を分けてもろうて。ついでにお酒を貰（もろ）うて飲んだそうですね。ところがもうそこで寝てしもうて、ほしたら正月の朝になって、餅をどうするろうと思

いよったら、もち米をご飯に炊いて、餅に搗いたそうですね。ほいで、一般の人が正月前に搗いて、はやす（※1）より、もっと早ようにお雑煮を頂いたという話が。それも事実ぢゃそうですね。

（※1）餅を切り分けることの意。

蛇（じゃ）の出る淵の話

有名な怖い淵があって、そこへ恐々行って、魚を釣りよったら雨が降りだして、そしてもういのう（※1）と思いよったら、そこは蛇（じゃ）（※2）が出るっていうてね、竜のことぢゃけんど。出るので有名ぢゃったらしい。上で木こりが木を伐（き）りよって、実は、雨がボロボロ降り出いて、伐った木が滑ってですね、その淵へまっすぐ飛び込んだらしい。そしたら、その下であめご釣りよった人は、いよいよ蛇が出たと。結局ね、山師が木を伐ったのを失敗して、それが飛び込んだらしいんぢゃけんどね。そこでその淵は、蛇が出るって言うんで、ますます有名になったらしいですねえ。

（※1）「帰ろう」という意味。（※2）竜、大きな蛇の意。

5. 高知県香美市物部町別府の民話

物部町別府では全部で10話を収集することができた。内訳としては、伝説が6話、昔話が0話、世間話が4話となった。また、民謡を1つ収集できた。漢字を当てることのできない人名、食べ物の名称などはひらがな、漢字を当てることのできない地名、生活用具（民具）などはカタカナで表記している。

【伝説】

番所（ばんしょ）と不入山（いらずのやま）の話

別府には番所（ばんしょ）があったんでねえ、阿波土佐の。その番所のそこへ奉公に上がる人がおった。奉公というか番所の中の仕事の。別府の番所も範囲が広くて、四ツ足峠まで全部所有地ぢゃったん。作るところも広かったし、山の仕事をしても。そういう中でするのに、子供を小さな連れたお母さんが仕事に行って。行ったら山の穀物を取って、伐り畑のね、うちへ持って来にゃいかん。自分の赤ん坊も背負わないかん。けんど自分の子供よりか、その仕事を、大事にしてもらわないかんという、庄屋さんのお達しで。子供はスキ（※1）で、木のねき（※2）の杭へ縛って、うちへ取った穀物を持って帰って。その子供を迎えに行ってみたら、スキだけしかないと。子供がいなくなっちゅう。さあそのお母さんは、一生懸命探していると、子供の泣き声が聞こえだした。それを夜が明けるまで追わえて探した。という言い伝えがある。その山は今でも「不入山（いらずのやま）」と。

（※1）おんぶ紐のこと。（※2）そば、かたわらという意味。

太刀（たち）の舞（まい）の話

曽我（そが）神社というのが徳島の方から街道を通って、赤岡の塩田をしよった所へね、塩買いに行きよった、馬で。その時代のエピソードと言うか話もあるけんど、うちの方で、いざなぎ流の太夫さんが剣の舞と言うのを、恐らく曽我神社と思う、赤岡にある。あそこで毎年集まって、方々から。ただ、この別府から行った太刀（たち）の舞（まい）が華やかで、人気があって、他の所よりあれなんで、祭りの日を、一夜（ひとよ）遅らし

て通知が来て、太夫さんが太刀を負うてお祭りに行きよったら、臼木のトンネル、大栃の下に、あそこの上を通った街道筋に、そこ行って一休みしよったら、その守(も)り子(こ)さんが、「一夜遅れの神参(かんまい)か」言うて、「しもうた、日を違えて案内せられたもんで、昨日で終わっちょった」というところで。太刀を一度外に出したら、目的の神社で舞わんとおさまらん、太刀の舞をどうしても舞わずに帰るわけにはいかんけん、その家地(やじ)で舞うて。帰るつもりで舞うたら、臼へ太刀が当たって火事になった、という言い伝えを聞いた。

たかきびの穂の話

体格のでっぷりした、一人のおじいさんが、毎年暮れに来よった、そして泊まって。どっから来たとも知れん、どこへ去っていったとも分からんじいさんが来よった。そのじいさんが、泊まらしてもろうてお世話になったんで、どっからともなく持ってきたたかきびの穂を一穂、お礼にくれたという話が残っちゅう。「そのたかきびの穂をつくって、たかきび餅を来年はつくって、わしに食べらしてくれい」と。こういう話があって、それを毎年毎年、たかきびをつくれば、大きな穂ができて、いっぱいたかきびができたよと、それを餅にしてもてなしよった時代が昔あったと。

そのじいさんがいつの頃か、だんだん泊まらす宿にしても、得体が知れないじいさんなもんで、なんか不気味にもなってきた時に、大豊の方へ越していく昔の街道筋のそばに、大きな岩がいくつかある。その岩と岩の間に大きな骨があった。そこでそのおじいさんが、亡くなっちょった。もうそれからは、餅を食べに来(こ)ざったと。その場所は、昔はいざなぎ流の太夫さんがおったんで、色々差し障りもする時に、太夫さんが占(うらの)うてみたら、そのところに行き倒れがあって、成仏ができてないと。それをちゃんと祀って、鎮めないかんいうので、そこに上がっていく所が、「成仏」という山の途中の名前。そのあった所が、亡くなったろうか、という場所が、「ウスノクボ」という。臼のような骨があったという。その骨は、脊髄の臼のような形ぢゃったんぢゃろうと思う。

そこにはね、自分の山なもんで、手近な所なんで、ようその昔話で、子どもの折から聞いて、その山へは、旧の暮れの 28 日には、行ったらいかんと。旧の暮れは、28 日を省いた日に、注連縄(しめなわ)と餅を、たかきび餅をね、進ぜてやらないかんと。いつの頃から続いたかわからんけんど、自分は、足が元気なうちは、注連縄と柿と餅を今でも供えちゅう。

七人(しちにん)ミサキの話

別府での聞いた話では、この物部の目の前の川にね、材木の伐(き)り出しの、筏に組んだ川流し。昔はそれをする技術は、この地域にはなかったんで。筏流しという。信州のベテランの方が七人(しちにん)衆でやってきて、伝えてくれたという話が残っちゅう。物部川の水は、あまり水量が無いもんで。なかなか筏に組んで流すにしても、流れんのよね、材木がね。そこで信州の来ちょった人が教えてくれたのは、川の淵尻へ筏を組んで、そこへ、山の苔をね、岩に生えちゅう、それを詰めて、水を貯める、木材でダムを造っちょって。そこへ水がいっぱい貯まって、材木がそこへ来た時に、材木の一本をトビグチで外したら、全部その貯まった水で流れていくという筏流しを、教えてくれたという。

それもずうっと、何日も何日も習うて、覚えたころに、もうある程度習得できたんで、その川下で作業されよる時に上の堰を切ったらしい。そしたら、一気に流れて亡くなった、という伝説が残っちゅ

う。それも、そういうことをした後に、もの凄い大雨が降って、雷が鳴って、滝のような雨が降って、その雨も血の雨が降ったという言い伝えがある。

そうしたものを、そんな無残に、お世話になったものをしたということで反省をして、七人（しちにん）ミサキ、というものをね、川ミサキ、七人ミサキ、そういうものを、いざなぎ流の太夫さんが、七人の御霊を鎮めて、もうのちのちも無事にみんなが暮らせるようにと言うんで、供養してそれを祀った。というその七人ミサキというのは、いざなぎ流の祀り方で、御弊（ごへい）もそういうのがあって、お祭りをするときには、七人ミサキの、注連もして、お餅も米も進ぜる所です。もう山のミサキへ、見晴らしのええ所へ祀っちょった。

それは自分たちの、もう場所が悪いけんでよう行かんけども、ほん若い頃、供養柱も作って、太夫さんがそこへ祈って、何年経ってきても、年がきたら、またそのものの供養もしてという、お祭りも繰り返しやりよった。それに対する、餅と、注連というのを自分も、ずっと先輩から習うてきたものを、去年まではした。

「塩」の話

昔、兄弟の力持ちの人が住んぢょった。その方の名前が、助六（すけろく）に助七（すけしち）、でしたか。その方が残しちゅうのが、力の仕事とか。あの塩が峰に昔、赤岡の方の神社へ、奉納相撲とかする時には必ず行きよった、という話がある。塩の道の時代に褒美を頂いたのが、塩が峰で祀られておる。あの塩が峰神社。助六さんが褒美の塩の俵と神様（※1）と担うて、塩ヶ峰の街道筋で一休みしたら、神様が動かなくなって、オーク（※2）が折れて、塩の谷へ塩の俵が転んで、あそこが「塩」という地名になった。

（※1）おそらく御神体の石。（※2）荷を背負うための棒状の木。

そうかんさんの話

そうかんさん（※1）がまだ健在で生きちゅう時に、八幡様（はちまんさま）へお参りに、そうノ市さんというその太夫さんと京都へ、いざなぎ流の位を受けに行ってきたという話がある。人足ぢゃった、そうかんさんは。母の言うには、そうノ市さんの人足で行って、そうノ市さんという太夫さんが2階で許しを貰いゆう時に、その下で待ちよったんぢゃって。ほして太夫さんぢゃけん、そうかんさんもね、今、許しを貰いゆう頃ぢゃという時に、手の窪を上に向けて手を組んで拝んだら、米粒が落ちてきた。これはどうするかと思うた時に、これはもう頂けと思うて、米粒を頂いた。それで位があったんぢゃということを言うた（※2）。

（※1）いざなぎ流の教祖。「そうかん」は死後の名前。（※2）いざなぎ流では占いをする時など神事の際に米粒や小豆を用いる。米粒によって位の許しの可否をも占ったと考えられる。

法比（ほうくら）べの話

中尾の八幡様へお参りに来とる時に、そうかんさんとそうノ市さんが出会うたんぢゃね、八幡様の縁日の時に。2人が「法比（ほうくら）べをしてみようぢゃないか」ということになって。法比べをすると言うても、「京都へお前人足で行ったばあぢゃ」と言うんで、「そんなら一度場所を決めて法比べをしようぢゃないか」と。そうノ市さんは、「わしが偉いんぢゃ」と。「いやわしもそりゃ、ふるわんことはできるぜ」

とこういうことで、別府の落合に杉熊川と出会うた所に、両方の対岸に立って、呪文を唱えて法比べをしたという話がある。その場所に「法の石」、というとこがあって、そこへは末代まで上がってはいかんということになっちゅう。その法比べをした時に、双方とも同じくらいがあったもんで、川の水が水柱になって舞うて上がった、という言い伝えがある。

【世間話】

兄弟の怪力の話

その助六（すけろく）さんと言う方は、昔の9尺もあるような大変大きな、各家庭には、百姓するのにたまり（※1）があった。兄さんの方はたまりを造るところを、1メートル50センチくらいの深さに、9尺の直径のを、昼までに堀あげてしもうて、その弟さんの方は、山へクレ（※2）にする木を伐りしないて。そのたまりに使うクレを、伐りに行って、背負うて帰ってきた、大きな丸太を。ほして兄弟で、両方に柄のあるオガ（※3）でね、それを兄弟で朝一切って来たのを昼から引き割って、その兄さんの方は、床を掘っていた。それを昼までに負うてき、昼までに掘って、昼からは兄弟でそれを引き割ったと。

（※1）便所の意。（※2）桶のこと。（※3）大型の木挽き鋸のこと。

かいつりの話

かいつりに行ったら、ほっかむりの代わりに、嫁さんの腰巻をかぶって行ったもんが、おったそうぢゃ。

託宣（たくせん）の話

自分が一番記憶に残っちゅうのは、戦争でフィリピンの南の方の、何というかわからん島で、自分の義理の兄貴が亡くなっちゅう。そういう人がね、どういう最後を遂げたのか分からん。それを、家祈祷した時に、いっぱい想いや、残って伝えたいこともあったろうにというそのもとに、家祈祷のときに、そういうものあれは、軍八幡様（ぐんはちまんさま）というものにする時に、伺いをたててした時に、やはり託宣（たくせん）と言うものを降ろすんぢゃね、太夫さんが集まって。その託宣と言うのは、1つの占いの、そのものに成り代わって、言葉を発する、そういう神がかりのあれをしよった。自分は何回もは見たこと無いけんど、昔それを見たとき。輪になって、神楽幣（かぐらべい）というので、太夫さんがくらえて（※1）、太夫さんが神がかりがきたら、舞を舞いだしよった。それが倒れるまで舞うもんで、倒れんうちにタヂカラオノミコト（※2）ぢゃないけんど、力の一番ある、若い元気な太夫さんが抑えちょく。そのときに、「私はこういう戦地で、こういう務めをしよった中に、敵の弾を、当たって、こういう不慮の死を遂げた」というのを、「託宣降ろし」というてしよった。太夫さんが、終わったらお祓いをして元のに戻しちょった。

（※1）仏道の修行を積んで、神様の位にすること。「いざなぎ流」では修行を積んだ太夫は神様になる。

（※2）天岩戸を押し開いた神。

【民謡】（5）

普請（ふしん）の時の唄（※1）

この家　お家の　石の口　大黒柱の搗きはじめ　辰巳の方へ搗きまわし　戌亥の方へ搗きおさめる

悪事災難搗きのけて　福徳幸い搗き寄せて　子孫は栄えて　富貴繁盛（ふうきはんじょう）　と搗きはじめた　やれまかしょうの　どっしんと

（※1）この唄を歌ってから、石の口を搗く作業を始める。

6. 再分類についての考察

福田（2000）によれば、【昔話】の定義は、〈伝承者〉は「語り爺・語り婆」、〈伝承の機会〉は「イエの炉端」、〈伝承意識〉は「あったかなかったか不確かな虚構」、〈証拠の有無〉は「ナシ」、〈時制〉は「遠い昔」、〈固有性〉は「ナシ」、〈叙述形式の有無〉は「アリ」である。伝承上の特質は、「異常な幸福を主題とし、人間存在の可能性を肯定する観念で、人間の幸福を確認する思想をもつ」である。【伝説】の定義は、〈伝承者〉は「古老」、〈伝承の機会〉は「祭儀の周縁」、〈伝承意識〉は「信ずべきコト」、〈証拠の有無〉は「アリ」、〈時制〉は「古へ世・中つ世」、〈固有性〉は「アリ」、〈叙述形式の有無〉は「ナシ」である。伝承上の特質は、「聖なるコト・モノの由来を主題とし、小自然の営みを畏怖する観念で、小自然の起源・崩壊を恐れる思想をもつ」である。【世間話】の定義は、〈伝承者〉は「世間師」、〈伝承の機会〉は「談合の場」、〈伝承意識〉は「あったことが疑えない」、〈証拠の有無〉は「ナシ」、〈時制〉は「近代」、〈固有性〉は「アリ」、〈叙述形式の有無〉は「ナシ」である。伝承上の特質は、「奇異・不思議な伝説を主題とし、人間・社会に畏怖・驚嘆する観念で、人間社会の現実を見極める思想をもつ」である。

これらの定義に基づいて、再考してみたところ、最初に語り始めのことば（発端句）「とんと昔」で始まり、語り爺・語り婆が、イエの炉端で、証拠がない、あったかなかったか不確かな虚構について、遠い昔の出来事として語り、最後に語り納めのことば（結末句）「昔まっこう　さるまっこう。さるのつべは　ぎんがりこ」で終わる話は、大豊町岩原と物部町別府において、ひとつも確認できなかった。したがって、【昔話】は、両地点において聞かれなかったことになる。

大豊町岩原の民話において、「立川（たちかわ）送りの話」を【昔話】から【世間話】としたのは、、世間師が、談合の場で、証拠はないが、あったことが疑えない、固有性のある近代の話を語っているからである。これに叙述形式はない。「シデンタキの話」を【昔話】から【伝説】としたのは、古老が祭儀の周縁で、古へ世・中つ世の出来事について、証拠があり固有性のある信ずべきコトとして語っているからである。これに叙述形式はない。ただし、大豊町岩原の「年玉の話」については、【世間話】として話されているが、話型的には【昔話】の「団子聟」と共通するものである。

物部町別府の民話において、「番所（ばんしょ）と不入山（いらずやま）の話」「太刀（たち）の舞（まい）の話」「太刀（たち）の舞（まい）の話」を【昔話】から【伝説】としたのは、古老が祭儀の周縁で、古へ世・中つ世の出来事について、証拠があり固有性のある信ずべきコトとして語っているからである。これらに叙述形式はない。「兄弟の怪力の話」を【昔話】から【世間話】としたのは、世間師が、談合の場で、証拠はないが、あったことが疑えない、固有性のある近代の話を語っているからである。これに叙述形式はない。また、「普請（ふしん）の時の唄」については、唄であるので、「伝説の特殊な例」とするよりも、「民謡」の方が適切である理由で、「民話」と別に扱うことにした。

7. 土佐の昔話の語り納めのことば（結末句）「昔まっこう さるまっこう」の語源

土佐の【昔話】の語り納めのことば（結末句）には、「昔まっこう さるまっこう」とあり、その続きには「さるのつべ（尻）は ぎんがり」「さるのつべは ぎんがりこ」「さるのつべは ぎんがりこ でおしまい」のようなバリエーションがみられる。有名なフレーズであるにも関わらず、これまで語源未詳であり、「リズムを整えるためのもので、特に意味はない」というのが通説であった。

ところが、今回のプロジェクトを機会に語源探索を試みた結果、その語源が解明したのである。これは、本プロジェクトの副産物とも言えるものである。

室町末期の御伽草子『福富物語』[6] には、次のように、

侍従殿、犬のしきりて鳴は、もし盗人か、いて射ころさんと、小弓もて出給ひ(マヽ)とも、鬼といふ声に、そつとして、かへらせらる

むかしは、まつかう

（侍従殿、犬のしきりて鳴くは、もし盗人か、いて射殺さんと、小弓持ちて出で給へども、鬼といふ声に、そっとして、帰らせらる。昔はまっかう：筆者）

とある。語り納めのことば（結末句）は、「昔は真斯(まっこ)う」で、「昔はまさにこのとおりであるの意」である。「昔は・・・」のように使われていたことが分かる。

江戸時代の浄瑠璃『傾城八花形(けいせいやつはながた)』（1703）には、「昔まっかうさる人の、かきつたへたる物語、うつして今に」とある[7]。「昔まっこう」は「さる人」に掛かっている。

同じく江戸時代の『譬喩盡並びに古語名數(たとへづくし　こごめいすう)』（1786）四巻 む之部には、「昔先箇様猿(まつかうさる)の尻(しり)は真赤(まっかい)な昔咄ノ結語也」のように、「昔咄ノ結語也」として、昔話の語り納めのことば（結末句）であることを解説している[8]。「さる」は「去る」と「猿」の掛詞であることが分かる。

「まっこう」は、土佐ことばでは「真っ赤」の意味である。「ぎんがりこ」は、和歌山方言で「蘇鉄の実」を表すことが分かった[9]。「猿のつべ（尻）」も両方「真っ赤」である。「真っ赤」は「全く・すっかり」にも通じる。「昔はまさにこのとおり」と言っておいて、実は「真っ赤なウソ」で、この話は「全くのフィクションですよ」と結んでいるのである。

6. おわりに

大豊町岩原では、全部で 12 話を収集することでき、【伝説】が 3 話、【昔話】が 0 話、【世間話】が 9 話となった。物部町別府では全部で 10 話を収集することができ、【伝説】が 6 話、【昔話】が 0 話、【世間話】が 4 話となった。そして、【民謡】を一つ収集することができた。

先行研究の【昔話】の定義に基づいて考察すれば、今回収録した民話の中には、両地点において該当する話はなかったことが分かった。ただし、大豊町岩原の「年玉の話」は、【世間話】として話されているが、話型的には【昔話】の「団子聟」と共通するものである。

また、土佐の【昔話】の語り納めのことば（結末句）には、「昔まっこう さるまっこう」とあり、その続きには「さるのつべ（尻）は ぎんがり」「さるのつべは ぎんがりこ」「さるのつべは ぎんがりこ でおしまい」のようなバリエーションがみられるが、「昔は真斯(まっこ)う」で、「昔はまさにこのとおりであるの意」であり、「さる」は「去る」と「猿」の掛詞であることが分かった。

さらに、「まっこう」は、土佐ことばでは「真っ赤」の意味である。「ぎんがりこ」は、和歌山方言

で「蘇鉄の実」を表し、「猿のつべ（尻）」も両方「真っ赤」で「全く・すっかり」にも通じ、「昔はまさにこのとおり」と言っておいて、実は「真っ赤なウソ」で、この話は「全くのフィクションですよ」と結んでいることであることも判明した。

今後の課題として、さらに民話の採録数を増やして、体系的記述と分析･考察を試みたい。その上で、「言語文化教育」に民話研究をいかに還元できるかについて、議論を深めていきたい。

本稿を成すに当たり、岩原の下村堯基さんと別府の松本善夫さんには、大変お世話になった。講演・シンポジウムでの際、常光 徹先生には、大変お世話になった。ここに記して、感謝申し上げたい。

【注】

(1) 福田（2000：p. 5）参照。

(2) 福田（2000：p. 7）参照。

(3) 立命館大学説話文学研究会編　（1983：p. 12）参照。

(4) 立命館大学説話文学研究会編　（1983：pp. 14-26）参照。

(5) 橋尾（2019：p. 71）では、「伝説の特殊な例」としたが、「民謡」に分類した。

(6) 横山・松本（1983：p. 352）参照。

(7) 愛媛県史編さん委員会編（1984）「第十章 口頭伝承 第二節　昔話・トッポ話・早口言葉など」『愛媛県史 民俗 下』（データベース『愛媛の記憶』）の「発端・結末句」の項参照。

(8) 宗政編（1979：p. 257）参照。

(9) 吉川（2012：p. 1）参照。

【引用・参考文献】

石井正己編（2016）『昔話を語り継ぎたい人に』三弥井書店

市原麟一郎（1972）『土佐の民話』土佐民話の会

小松和彦（2011）『いざなぎ流の研究－歴史のなかのいざなぎ流太夫－』角川学芸出版 p. 4

坂本正夫（1976）「〈地域別〉民話調査・展望と視点 四国」『國文學 解釈と教材の研究　民話の手帖』11 月臨時増刊号　學燈社 pp. 156-157

常光　徹（2000）「民話の調査と研究－初めての調査地で論文を書く－」『日本の民話を学ぶ人のために』世界思想社

釣井龍秀編（2011）『豊永郷文化通信 3』NPO 法人定福寺豊永郷民俗資料保存会 p. 1

橋尾直和（2019）「高知県長岡郡大豊町岩原と香美市物部町別府の民話」『高知県立大学 文化論叢』第 7 号 pp. 61-74

福田晃（2000）「民話とは何か」『日本の民話を学ぶ人のために』世界思想社 p. 5、p. 7

立命館大学説話文学研究会編（1983）『高知・西土佐村昔話集（昭和 52 年度・53 年度調査報告）』青文社 p. 12、pp. 14-26

宗政五十緒編（1979）『たとへづくし－譬喩盡－』同朋舎 p. 257

横山　重・松本隆信（1983）「福冨物語　赤木文庫蔵　341」『室町時代物語大成』第 11 巻　角川書店 p. 352

【引用・参考ＵＲＬ】

愛媛県史編さん委員会編（1984）「第十章 口頭伝承 第二節　昔話・トッポ話・早口言葉など」『愛媛県史 民俗 下』（データベース『愛媛の記憶』）愛媛県生涯学習センター

http://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:2/50/view/6632

大豊町教育委員会「岩原・永渕神楽（無形）」『おいでよ！おおとよ』

http://www.town.otoyo.kochi.jp/life/detail.php?hdnKey=445

吉川勝洋「和歌山の民話」『和歌山県ふるさとアーカイブ』和歌山県文化情報アーカイブ事業 HP

https://wave.pref.wakayama.lg.jp/bunka-archive/minwa/kaisetsu.html

（はしお　なおかず・本学教授）